

非凡であつたことを物語る挿話

さて、上人は、説法の際いつも「弁栄上人は斯々仰せられ……」と、お述べ

威神光

戒淨上人御真筆「威神光」

(京都 高橋春子刀自蔵)

になり、決して何一つ自分の体験については語られなかった。しかし、上人の説かれたところは、特に晩年のそれは、すべて御自身の体験によって裏づけられていた、と信ぜられる。上人は、謙遜すぎるくらい謙虚なお方であったから、「私は三昧発得の体験者である」とか、「自分は仏である」などとは一度もいわれなかった。しかし、実に非凡な卓越した宗教家であられたことは、次にかか

その一

私、以前に哲学のほうでカントのものを少し研究したいと思って純粹理性批判等の和訳したものを読みましたが、どうも大切なところが和訳では珍紛漢紛、また原語で同一の言葉を使っていますと各々違った意味をもっています場合、翻訳本を見ますと同じ言葉で訳してありますので、前後矛盾して論理整然たる一定の連絡がありません。大変困りました少しばかり速成のドイツ語を習い、丸善で原著を手に入れて、字引と首ッ引で苦心惨憺読みました。スラッと解りましたでございますな。私、やはり外国人の著書は、原著を見まさんと本当の意味が解らない、原著を読むに限ると思っておるのでございます。

(20)「笹本戒浄上人しのびぐさ」六六―六七頁。

ところが如来様の大円鏡智をいただきますと、その本を書きました人の思惟過程、エー、そのときその人の頭の中で、どう考えて、その結果このようなことを書いたかというところまでわかっておりますので眼光紙背に徹するわけでございます。⁽²⁰⁾

その二

上人「越後のあるところでの話でございますが、光明会の布教師などがまいりますと、ぜひ一度読んでくれと申して、軸物をもってこられる方がありました。そして講師たちが読めないとトクトク然としてせせら笑っておられる方だそうです。私もやはり読んでくれといわれましたので、一心に如来様をお念じ申して目を開きますと、スラツと読めました。その人はサモサモいまいましいような、残念そうなお顔で出て行かれました。⁽²¹⁾」

(21)同上六七―六八頁。

その三

ある尼僧の方が初めて庵室をもたれたとき、その庵室の経済状態が非常に悪くて、途方にくれておられた。そのころ初めてお目にかかれた笹本上人が同尼に向って、藪から棒に「庵主さんは、お金のことで困っておい



過去帳のはじめに書かれた戒
浄上人のお若い頃の筆跡

(横浜 慶運寺蔵)

(22) 太田耕治氏稿「御逸話二
題」・光明一八〇・一八一合併
号。

ですすね」とたずねられた。「はい、その通りです」とお答えすると、「そのことは近々のうちによくなるから、御心配にならぬように」とおっしゃった。そうすると間もなく同尼の妹さんという方が成功されて、いろいろと後援され、庵室の改築までして下さって上人のお言葉のとおりになった。もう一つのお話は、やはりその尼僧さんに向って、上人が「庵主さんの肩のうしろに、御親戚の方で餓鬼道に堕ちた方が見えている」と、おっしゃった。それから上人は、それが一人ではなくて、三人見えている、といわれるので、その人たちの様子をおたずねしてみると、同尼には一々思いあたるふしがある。そのことを申し上げると、上人は、一年間毎日大薫香一本を念仏して、その方々に回向することをお勧めになった。そこで同尼は、その縁者の方々の得脱を見るまで、上人のお導きの通りを実行された、⁽²²⁾という。

その四

私、以前に大切な印鑑を落したことがありますが、ある人がそのようなときは、じっと心を静めて考えてみると落したときの隙が思い出されてわかるもので、左様にしていると自分の生れる以前のことともわかる、とい

(23)石橋到氏談「他心通」・光明
一八〇・一八一合併号。

うような話をしておりましたが、うわさに聞けば、笹本上人は七生も八生も前の生がおわかりになるそうだが二、三生のことなら私にもわかると思うがと、そのようなことを考えてお尋ねしようと思ひますと、上人「石橋さん、自分の生なんか七生八生以前のこと、あるいは二、三生前の生がわかるのも同じことで、それは二、三日前のことは、記憶に新しいでしょう。また子供のときは忘れているようですが、考えていると思ひ出すようなもので、人の生もかようにして十生前のこともわかるものです」と。

*

夜寝むとき、上人は奥の別室で寝まれておりました。私は夜中に時計が何時か知りたくて枕元の時計をごそごそ探しておりましたが、暗くてわからずそのまま眠りました。翌朝上人は「石橋さん、時計はありましたか」と問われたので、「ハア」とあいまいな返事をしましたものの、内心ぞつとして背筋に何か走るものを感じました。⁽²³⁾

その五

現在、岐阜におられる(もと大野)蓮教尼がまだ埼玉の利哲庵におられる頃、ちようどそれは昭和四年の師走の二十一日の朝であった。自村の檀家

昭和初期の山口善生寺三門



の御浄飯に行きおつとめの後、空を見ていると、鳥が「カアカア」とやかましく啼いているので、俗に尾先が向った方に不幸があるというがと、心で思いながら見ておられた。するとその翌々日、次のようなお葉書が上人より届き、どぎもを抜かれたという。上人の投函は消印を見てもわかるようにその日の午後であつた。――「前略、御親戚中に御不幸の方あらせられ候趣まことに無常遷流の世の中、からすなく誰ぞといふに後ずさりうしろから来る無常知らずよ」（徳本行者の御遺詠）桑原く、御同様大切なるは念仏云云」と。

またこんなこともあつた。董寺横浜慶運寺の檀徒総代であり、光明会本部の役員でもある太田佐兵衛氏が、昭和七年五月一日より山口善生寺にてお別時あり、これに参加申込み、二十九日横浜出発予定のところ、二十六日川崎市在住の同氏嚴父が急病にて重態の由、通知がきた。早速その旨をお上人にお伺いにゆかれると、お上人ははつきりと「それは残念ながらやむをえません。しかしお別時に御参加になられるお心だけでも、御病人はきつとよくお治りになります」と、言下に断定された。それを伺い早速病人の許に行かれると、真症の肺炎であり、八十歳の高齢のこととて医者も家族も皆とうてい望みないものと思ひながら看病している。ところが不思議



熊野宗純師

○某師がある時熊野師に「光明会をやっている」と総本山布教師として行き先不安である。それで光明会を止めさせて頂きたいと思いますが」とすると師は言下に「馬鹿！」と一喝された。それで某師は吃驚するやら、熊野師の熱烈な信念に感動するやらして、その後益々光明会のため活動されるようになった。

○師は晩年側近の弟子に「この善生寺(自坊)はどうなつてもよいから、光明会のため一生懸命にやってくれ」と語られたという。

(24) 杉田善孝師稿「十方目前・光明一八〇・一八一合併号」

議にも、お上人の言葉通り一週間たつと熱も完全に分離、文字通り日毎く薄紙をはがす如く快癒して、もとのように元気になられた。そして翌々年の冬、老衰で八十二歳を以て病歿されたが、それまですこぶる元気であつたと。ついでに太田氏は五月十日頃、病人の様子を見届け、九州地方の所用を兼ね、善生寺に熊野上人をお訪ねして、事の始終をお話申し上げ、ともに笹本上人のお心の鏡の了々たることを讀歎されたという。⁽²⁴⁾

その六

上人がお話のとき、いつも仰せられた「赤色光線の振動数は、一秒時間に三五〇兆回、紫の光線は、七五〇兆回の振動数が云々」を聞いたS教授(白川寿美男氏)は「ほんとに知ら」と思つて、ある日計算してみられたところが紫は七五〇兆回であるが、赤色光線は三七五兆回の振動数なので、いつか上人に申して訂正しなければならぬと思つておられた。ある夏、唐沢山の念仏に参加し、少し早く帰るため上人に挨拶に行かれた。そうするとだしぬけに上人から「私の申していることで学問上違つていることがありましたら教えていただきたい」とうながされ、初めて気づいて振動数の誤りを申し上げたところ、「さようで、私はヴァントの心理学にのつていたまますを

(25)「エピソード」・大光明八六号。なおこのエピソードは、右の文中にみえているS教授の、「かがやくみ教」(光明二二七号)と題する文章中にも紹介されている。本書第三部参照。

知恩院大門前での記念写真

(昭和八年一月、京都 信重院別時會。戒淨上人の右は藤堂祐範先生)



申していました。ありがとうございます」と礼をいわれ、そぞろ教授も尊く感じた、と。⁽²⁵⁾

その七

昭和八年一月三日より七日まで知恩院山内信重院における上人の別時會に参加せられし京都の宮田泰三郎氏、一度上人よりお十念をいただきましたと思えど、お部屋は常に質問者で満員にてお伺いする機会もなく過せし五日朝、中庭に出てフトお部屋の近くに行きしに、折しも閉じたる障子の向うより質問者への上人のお答が尊くもれ聞え、そのありがたさのあまり、心の中にて「ここから上人様を礼拝させていただこう」と決心し、至心に礼拝お念仏せられしに、その日の昼食後、大門前にて記念写真の撮影に際し、左側の上方にずっと離れて立つておられし宮田氏のそばに、上人つかつかと歩み寄られ「アノ、先刻はありがとうございます」といって、おつむを下げられ、ていねいにお十念を授けたもう。宮田氏驚きと勿体なさに茫然としてありがたさに涙されしと。弁栄聖者は一切見通しのお方であった、と上人よりしばしば承わっているが、実に上人もまた左様であったと、宮田氏先年余に語られき。⁽²⁶⁾

(26) 杉田善孝師稿「笹本戒淨上人しのびぐさ」七〇頁。

さて、以上は、上人の非凡さを物語る挿話の一部である。もともと私はこれらのお話の関係者に一々あたつて、その事実を確かめたわけではないから、話の筋などには多少の誤伝もあるかも知れない。しかし、上人が一切見通しの非凡な宗教的人格者であられたことは、以上の挿話によつても十分に推察できると思う。